水系統しか残ってないんだって

作者不在

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水系統しか残ってないんだって

【Ｎコード】
Ｎ３２９５Ｚ

【作者名】
作者不在

【あらすじ】
十六歳にしてサバイバル生活を送っていた少年は、熊との死闘の最中に木の幹に躓いて命を落とす。神との邂逅、課せられた試練、与えられし、水の力。少年はその全てを適当に流し、食っちゃ寝食っちゃ寝するために異世界へ渡る！
※主人公にやる気がありません

一話　飲み水って大切（前書き）

初めまして。更新は遅くなりますが頑張ります。

一話　飲み水って大切

目を覚ますと、俺はおかしな空間にいた。なんだここ？　見覚えないぞ？
俺がキョロキョロと辺りを見回すと、近くに三毛猫が一匹座っていた。

「目が覚めたか、小僧」
「うわ！　驚いた、喋るのか」

じっと俺が三毛猫を見ていると、三毛猫は流暢に喋り出した。喋る猫なんているんだな。初耳だ。ていうかここ本当にどこだ？　俺は森の中で熊と闘ってたはずなんだが……。

「小僧は死んだ。だからこの天界にいるのだ。つまり私は神だ」
「あ、なるほどね。俺死んだのか。で、あんたが神。ちなみに死因を聞いてもいいか？」

いつ死んでもおかしくない生活してたし今更驚きはしないよな。神様なんて嘘ついても得はないだろうから本当なんだろうし。でもどうして死んだかは気になるな。熊に負けてたわけでもないし……。

「随分あっさり受け入れたな……。まあいい木の幹に足を取られてつまづいたところを熊に殺されたのだよ。鋭い爪で頭を切り取られ

ていたから記憶が少し曖昧になっているかもしれないな」
「言われて見ればそうだったような……。やっぱどんなに強くても人間あっさり死ぬもんだな」

別にやり残したこともないからいいんだけどな。それに死んだってことは永眠したってことだろ？　永遠に眠れるなんて最高だ。人間、食って寝ることだけするのが一番の幸せだよな。

「そんで、死んじゃった俺は一生ここで眠ってればいいのか？」
「いや、そうではない。お主には生き返るチャンスやろう」
「？　いらないけど？」
「えっ」

えっ、なんて言われても、別に生き返りたいなんて思って無いし……。森の中でサバイバルしてた人間が未練なんてあるとでも思ってんのかね。あ、ホームレスって言った方がいいのか？

「ふむ、ならば言い方を変えよう。お主には生き返るための試練を与える。この試練をクリアしなければ、お主の魂は永遠に眠ることが出来なくなる」
「えー、なんだよそれー。俺にメリットがないじゃん。やる気でねー」
「いや、クリアした場合は永遠の命と永遠の食料。そして最高の寝床を用意してやろう」
「……マジ？」
「マジだ」

「なら……、やるしかないな」

一生なにもしないで食っちゃ寝食っちゃ寝の生活が送れるなんて夢みたいだ。そんな怠惰な生活が俺は大好き。森に居た頃は闘わなきゃ食料は得られなかったしなぁ……。

「では試練の内容を説明しよう。まずお主には異世界に転生してもらう」
「ふむふむ」
「その異世界にはお主の他に五人の転生者がいる」
「ふむふむ」
「その五人が持っている『証』を奪う。これが試練だ。そしてお主にも『証』は渡され、他の五人はお主の『証』を狙ってくるだろう」
「ふむふむ」
「そしてその異世界で簡単に死なない様に、そして他の転生者と互角に戦うために、三つの力を授ける」
「なるほどー。それで、どんな力が貰えるんだ？」

出来れば食っちゃ寝食っちゃ寝するだけで生きられるような力が欲しいな。働くのはマジ勘弁。学校とか行ってる連中はどうかしてるぜ。あ、ちなみに俺十六歳ね。

「まず一つ目だが、強力な魔法だ。本来は火、水、風、地、氷、雷の中から一つ選んでもらうわけだが、上からの指示で他の転生者と同じ系統は選べなくなっている」
「つまり、あと一つしか残ってないってことか……」

「そうだ。そして残っているのは水系統だ」
「水！　やった、これで飲み水確保！」
「えっ」

なんか猫型の神が意外な顔してるけど意味がわからない。だって水だぞ？　あの水だぞ？　嬉しいだろ？むしろ嬉しくないわけないだろ？　生物には必要なものだぞ？　ていうかなんで余った？　意味わからん。

「おほん！　まあ気に行ったのならそれでいい。次は二つ目だが――」
「ちょっと待った。その前に一つ聞きたいんだが、水の魔法っていうのは、水っていう『概念』を操るのか？　それとも、水っていう『物質』を操るのか？」
「……ほう」

猫神の目が急に細くなり、俺の目を睨みつけてきた。しかしここはちゃんと聞いておかなきゃなぁ。こういうのを曖昧にしとくと後々困るからなー。

「そこに目を付けるとは中々面白い奴だ。デフォルトでは、『概念』を操るということになっている。しかし、お主が望むのなら、『物質』に変えてもよいぞ？」
「じゃあ変えてくれ。あやふやな『概念』より確かな『物質』の方がいいからな」
「いいだろう。では二つ目だ。二つ目の力、これはお主が考えてよ

い。どんな力でもというわけではないが、割と自由度は高いぞ」
「じゃあ睡眠能力で」
「えっ」

即答した俺をおかしなものを見るような目で見てくる猫神。なんで？　なんでもいいんだろ？　だったらこれしかないだろ？

「身体強化とか、不老とかじゃないのか？　他の奴らは大体そんな感じだぞ」
「は？　意味わからんし。俺は欲望に忠実なだけだし。生き物なんて食うもん食って寝てれば生きていけるんだし。余計なものなんていらんし。精々あと一つ入れるとすれば、三大欲求の残り一つである性欲くらいだろ？　じゃあなに、魅了とかならいいわけ？」
「もういい、わかった。それに魅了はもう選択されている。睡眠能力だな。詳細はこっちで適当に決めておくとしよう……」

なんかゲンナリしてる猫神だがなにかあったのだろうか？　そうか、きっと寝不足なんだ。可哀想に、この世の中に寝不足ほど辛いことはないからな……。

「良い夢みろよ……」
「なんの話だ？　まあいい。では三つ目について説明するぞ。三つ目は武器だ。自分の使いたい武器を考えろ。能力はその武器によって私が考える。どの武器を選ぶかによって能力にも当たり外れがあるから気を付けろ。ちなみに剣や刀、槍はもう選ばれているぞ」
「武器か……、今までは素手だったからうまく扱える自身がないな

……」

自然界には武器なんて存在しないからな……。でも武器があったらイノシシとか倒すのも簡単だったかもなぁ……。あ、考えたらボタン鍋食べたくなってきた。

「武器の扱いの心配はいらんぞ。私の生み出した武器だけは完璧に使いこなせるようになるからな」
「ふーん、じゃあ……足甲で」
「足甲だと？　それは靴のことか？」
「まあ大体そんな感じだ」
「うーむ、まあいいだろう。ではこの三つの力をお主に授ける。精々足掻くのだな、己のために」

猫神がいきなりかっこつけたことを言い始めたんだがまあいいか。それより一つ気になることがある。なんで俺はそんなことをせにゃならない？

「なあ神さんさぁ、どうしてこんなことするんだよ？　あんたにメリットあんの？」
「上からの命令だ。私は詳しくは知らないのでな。それより、残りものには福があるということで、先に行った奴らの情報を教えてやろう」
「情報ねぇ……。まあ無駄な争いは体力の無駄だからな。その情報を元に逃げる計画を練るか……」
「おい、『証』を奪うのだぞ？」

「わかってるって。いいからほら、情報」
「マイペースな奴だ……。では系統ごとに説明するとしよう。まず火の系統を選んだ男は、お主らの世界で言う厨二病という奴だった。力に憧れ、格好いいとされる展開を好む奴だった。なんというか、主人公に憧れているという表現がぴったりの奴だった」
「ふーん……」

力に憧れる、ねぇ……。そんで主人公にも憧れてるってことは偽善的なことをするんだろう。力に溺れなければいいけどな……。まあ、俺には関係ないな。それに厨二病なら合えばすぐにわかるだろ。特徴的な奴で良かったってところか？

「二人目、雷の系統を選んだ女は、正義感が強く、曲がったことが嫌いな奴だ。生前から世のため人のためになることをし、死んだのも人を助けたのが原因だ。奴は恐らく正義の味方にでもなるのだろう。恐らく見つけるのも簡単だと思うぞ」
「女もいるのか……」

正義感が強い奴ってのは面倒なんだよなぁ……。なるべく関わりたくは無いなぁ……。あー、どうしよ。まあ目立たなければ大丈夫……か？

「三人目、風の系統を選んだ男は、外道。この一言に限るな。前世でも沢山の罪を犯してきた。間違いなく転生先でもなにかやらかすだろう。仕留めるなら早いほうがいいぞ。まあ、私は誰が勝とうがどうでもいいのだがな」

「外道、ね……」

どんな声で泣くんだろうなー。実は俺、弱者を虐げる強者ぶった弱者を虐げるのが割と好きなんだよね。別に人助けってわけじゃないけど。まあ俺は食っちゃ寝出来ればいいわけだから、出来ないならそれはそれで別に問題無いんだけどな。

「四人目、地の系統を選んだ男は、頭がいいな。今までの奴とは格が違う。お前はよくわからんが、他の奴と比べれば一番賢いだろうな。特に地の系統を選んだところが評価出来る。まあ、それがわからん輩も多いのだがな」

「へぇ……」

地系統を選ぶとは中々賢い男なんだな。地は応用性が高いから戦闘じゃなければ便利だしなー。もしかして俺と同じような奴かも……。一回あってみるのもいいかもなー。

「そして五人目、氷の系統を選んだ女は、挙動不審だ。自分に自信がなく、いつもおどおどしている。あんな様子では恐らく生き残れないだろうな。異世界でどれほど成長できるか、それが鍵だな」

「また女……」

でもさっきの正義感の奴よりはマシかもな。会っても別になにも言ってこなさそうだし。うん、こいつはノーマークでもいいかな。

「よっし、情報サンキュウな。それじゃあそろそろ良いぜ」
「そうか。ではさらばだ」

その猫神の言葉と同時に、目の前が真っ暗になり、更に次の瞬間、俺の体は妙な浮遊感を感じた――

☆　☆　☆

「十六歳にしてサバイバル。野生生物との死闘。欲望に忠実な生き様。……面白い。本当に面白い男だ。この私のペースを崩すことの出来る人間がいたとはな……。ふふ、少しだけサービスをしてやった。ありがたく思えよ、？6」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3295z/

水系統しか残ってないんだって

2011年12月11日12時45分発行